

説教『生きるにも死ぬるにも我が身によりて』

小河信一 牧師

フィリピの信徒への手紙 1章20節～30節

<sup>20</sup> そして、どんなことにも恥をかかず、これまでのように今も、生きるにも死ぬるにも、わたしの身によってキリストが公然とあがめられるようにと切に願い、希望しています。<sup>21</sup> わたしにとって、生きるとはキリストであり、死ぬことは利益なのです。<sup>22</sup> けれども、肉において生き続ければ、実り多い働きができ、どちらを選ぶべきか、わたしには分かりません。<sup>23</sup> この二つのことの間で、板挟みの状態です。一方では、この世を去って、キリストと共にいたいと熱望しており、この方がはるかに望ましい。<sup>24</sup> だが他方では、肉にとどまる方が、あなたがたのためにもっと必要です。<sup>25</sup> こう確信していますから、あなたがたの信仰を深めて喜びをもたらすように、いつもあなたがた一同と共にいることになるでしょう。<sup>26</sup> そうなれば、わたしが再びあなたがたのもとに姿を見せるとき、キリスト・イエスに結ばれているというあなたがたの誇りは、わたしゆえに増し加わることになります。

<sup>27</sup> ひたすらキリストの福音にふさわしい生活を送りなさい。そうすれば、そちらに行きあなたがたに会うにしても、離れているにしても、わたしは次のことを聞けるでしょう。あなたがたは一つの霊によってしっかり立ち、心を合わせて福音の信仰のために共に戦っており、<sup>28</sup> どんなことがあっても、反対者たちに脅されてたじろぐことはないのだと。このことは、反対者たちに、彼ら自身の滅びとあなたがたの救いを示すものです。これは神によることです。<sup>29</sup> つまり、あなたがたには、キリストを信じるだけでなく、キリストのために苦しむことも、恵みとして与えられているのです。<sup>30</sup> あなたがたは、わたしの戦いがかつて見、今またそれについて聞いています。その同じ戦いをあなたがたは戦っているのです。

(「キリスト者」だけで全き信仰が表明されていることを承知の上で、あえてこう言うのですが)まるっきりキリスト者、まるごとキリスト者、パウロ——彼は、私たち皆の手本となる信仰者です。およそ二千年の間の教会の歩みは、ひとえに神の力によるものですが、神の用いられた僕、パウロの存在の大きさは否定しようがありません。

苦難に遭ったり、挫折しそうになっているとき、信仰者はパウロの信仰をよりどころにして立ち直りをはかることができました。また、その人の信仰が平穩のうちに安定しているときにも、パウロの信仰は、さらなる聖潔や謙遜を目指す信仰者のしるべとなりました。

例によって(少なくとも我が身を省みれば)、パウロの手紙は、パウロと私との距離、すなわち、乖離を、具体的には、自分の中途半端さやだらしのなさを、またそれらとは逆方面から自分のりっぱさや尊大さをあぶり出すことでしょう。

ただし、その歯がゆい自分の現状に思い悩み続けることはありません。パウロもまた、歯がゆいばかりの自分や信徒に向き合った先駆者です。その距離、すなわち、あるべき姿(キリスト・イエスの僕)と

あるべきでない姿……洗礼の後も引きずり込まれる……〈罪の奴隷〉とのはるかな距離は、キリストの救いとそれを思い起こさせ続ける聖霊の働きによって消え去ります。

そこで「自分が」焦ってしまって、「自分で」歯がゆい自分やりっぱな自分と戦わないことです。日々に戦い続けているパウロの玩味すべき言葉にある通りです。

フィリピの信徒への手紙1:27-28——

<sup>27</sup> あなたがたは一つの霊(=聖霊!)によってしっかり立ち、心を合わせて福音の信仰のために共に戦っており、<sup>28</sup> どんなことがあっても、反对者たちに脅されてたじろぐことはないのだと。

まるとキリスト者、パウロが「まると」である所以は、旧約聖書の言葉から上よりのメッセージを豊かに受けていることにあります。フィリピの信徒への手紙 3:5-6 で、パウロは自己紹介しながら「(自分は)律法に関してはファリサイ派の一員、…(中略)…律法の義については非のうちどころのない者でした」と述べています。パウロの、十戒をはじめとする律法の受け止め方は、福音にふさわしく一新されましたが、パウロが郷里のタルソスやエルサレムで受けた律法に関する教育は大いに益となりました。彼の青年時代における律法教育に由来する益には、彼が律法により「正当に」(回心したパウロからすれば「不当に」)迫害してしまった人々の血と命がかかっていますから(使徒言行録 7:54-8:1)、パウロが律法に向き合う姿勢は、より真剣なものとなりました。

マタイ福音書13:52——

そこで、イエスは言われた。「だから、天の国のことを学んだ学者は皆、自分の倉から新しいもの(≡新約聖書)と古いもの(≡旧約聖書)を取り出す一家の主人に似ている。」

主イエスがパウロに出会われたとしたら、「あなたは天の国のことを学んだ学者である」とおっしゃられたのではないのでしょうか。本当の意味での律法学者・パウロは、その誤った理解をも熟知している適格者(Ⅱコリント10:18)として、福音に基づいて律法を説き明かす伝道者となりました。

新約聖書、フィリピの信徒への手紙 1:20-30 の背後にある旧約聖書の言葉は多々あると考えられますが、この部分の大きな主題「よみがえりの主」(フィリピ 1:23)の観点から一つの預言者の言葉を引用しましょう。

ホセア書6:1-2——

<sup>1</sup> 「さあ、我々は主のもとに帰ろう。

主は我々を引き裂かれたが、いやし

我々を打たれたが、傷を包んでくださる。

- 2 二日の後、主は我々を生かし  
三日目に、立ち上がらせてくださる。  
我々は御前に生きる。」

ホセア書6:2には、主なる神と正しく「主を知って」(ホセア書6:3)生きる信仰者との関係が鮮やかに描かれています。

- ① 二日の後、主は我々を生かし  
② 三日目に、立ち上がらせてくださる。  
③ 我々は御前に生きる。

神が「私たちが」①生かし、②立ち上がらせる。そして、「私たちは」神の前に③生きる——①②が先行する主なる神の御業、そして、③がその神の業に応答する人間の姿勢という詩文の構成になっています。

「生かす」「立ち上がらせる」「生きる」——三つの動詞すべて、未完了形なので、将来に対する預言、つまり、新約で成就する預言とみなされます。

さらに詳細にホセア書6:2を説き明かせば、次のようになります。

- ① 二日の後、主は我々を生かし  
……日々を支配する父なる神の計画。  
人、アダムを「生きる者」とされた神の創造の業(創世記2:7)。  
② 三日目に、立ち上がらせてくださる。  
……主の日に起こった主イエス・キリストの十字架と復活による救済。  
③ 我々は御前に生きる。  
……聖霊降臨によって、①②の神の計画と救済を思い起こして生きる信仰者の姿。  
再臨に向けて、日々、主の十字架と復活の恵みのうちに、死んで、よみがえって生きる私たち。

父なる神、子なるキリスト、聖霊が共に働いて、私たちが罪から救い出す御業が成し遂げられました。そして、私たちの生活の中心に、主の十字架と復活が据えられるように、神は働き続けておられます。パウロが、そのことを最も簡勁に表し、預言したホセア書6:2を愛唱聖句としていたとしても不思議はありません。パウロのみずみずしい復活信仰の上には、みごとな「古い実」(雅歌7:14)である御言葉の霊的な力が宿っていたのです。

それでは、個人消息の最終部分から、教会への勧めへと至るフィリピの信徒への手紙1:20-30を読みましょう。

フィリピの信徒への手紙1:20——

そして、どんなことにも恥をかかず、これまでのように今も、生きるにも死ぬにも、わたしの身によってキリストが公然とあがめられるようにと切に願い、希望しています。

パウロは、「私が切なる待望と希望をもって待っていることは、キリストがあがめられることである」と公言しています。文字通り、それを「首を長くして」待っています。「キリストがあがめられる」とは「キリストが大きくなる」ということで、「生きるにも死ぬにも」わたしの身を粉にして、自分を小さくして、キリストに仕えるのです。

おそらく、自力では「自分を小さくする」ことはできないでしょう。主の前に謙遜になるという際にも、りっぱにとか、美しくとか、あるいは、人から悪く思われないようにとか、自己顕示<sup>けんじ</sup>が生じて来ます。

それ故にこそ、「キリストが大きくなる」が第一にならねばなりません。「わたしの身によって」、つまり、「わたしの体」…わたしの生活全体…を捧げて、礼拝すること(ローマ12:1)から始めます。マリアの賛歌の冒頭にある通り、「わたしの魂は主をあがめます(大きくします)」(ルカ1:47)という讚美の心をもって、神を拝むのです。

ある意味では、次節の「死ぬことは利益なのです」(フィリピ1:21)という句は不可思議です。この世的に言えば、死は、最も大きな恐怖であり、自己の破滅であり、周りの人を悲嘆のどん底に陥らせるものです。

しかし、「キリストが大きくなる」という信仰に立てば、死において利益があらわされることが分かります。

信仰者にとっては、人の罪の積み重なりによって死が到来し、人を支配する、というその死が重大事です。この死の支配が始まると、人は「生きていながらも」死んだ状態になります。繁栄して幸せそうに見えても、霊的には、あるいは、神との関係からは、その人は死んでいます。

罪と死の縄目からの解放は、ただキリストの十字架によってもたらされます。「罪の支払う報酬は死である」(ローマ6:23)という報酬(人から見れば手に負えない借金)によってがんじがらめになっていた私たちは、価のつけられないほどに尊い御子の犠牲によって解き放たれました。

そのキリストの十字架を信じる、自分の罪科へ対する無償の赦しを信じる、という信仰は、神の恵みによることです。私たちの罪から解放される際の霊的な〈死〉、そして、私たちの寿命としての肉的な〈死〉を支配しているのは、諸悪の力ではなく、神の恵みです。パウロは、その恵みに感謝して、「死ぬことは利益なのです」と信仰告白しました。

## フィリピの信徒への手紙1:23――

一方では、この世を去って、キリストと共にいたいと熱望しており、この方がはるかに望ましい。

主にある平安のうちに、今すぐ天のキリストのもとへ……それがはるかにいいと言う……。まだ元気な人が……。私の寡聞<sup>かぶん</sup>にして、今日の教会であまり聞いたことのないようなパウロ<sup>あか</sup>の証しです。私たちは、聖日ごとに、使徒信条で「(主、イエス・キリストは)全能の父なる神の右に坐したまへり」と唱えています。パウロのように、そこまでは考えていないのが、私たちの現状でしょうか。

これぞ「まるつきり」の真骨頂、よみがえりの主への「まるつきり」信仰です。単なる神秘主義あるいは狂信的陶酔におけるキリストとの合体ではなく、信仰におけるキリストとの結合です。パウロには、十字架と復活による救いの出来事に基づいて、「キリストと共なる私」という信仰者の姿勢が確立されました。

パウロがここで「世を去って」というのと、「絶望した人々は生きることに嫌気<sup>いやげ</sup>がさして、死を頼みとする」(カルヴァン)というとは異なります。

パウロにとって、「肉にとどまる」(フィリピ1:24)この世の生も、充実しています。伝道の苦難は測り知れませんが、主にあって喜びに満たされています。「生きるとはキリストであり、死ぬことは利益なのです」との言葉の通り、パウロの全生涯、また、神の計画の下にある全歴史は、ただイエス・キリストによって貫かれています。信仰者パウロは、生きるのも死ぬのも、その主にゆだねっていました。

その観点からすれば、「世を去る」ことはささいなことで、「停泊している船が岸壁の綱を解かれ、次の港を目指す」ようなものです。誤解を恐れずに言えば、この地上から天の国へのお引越しです(参照 ヨハネ14:2-3)。パウロの言葉によれば、その際、ただただ神の力が働いて、「自然の命の体が蒔かれて、霊の体が復活するのです」(I コリント15:44)。それ故に、人は平安と喜びをもって御国へ旅立つことができます。

私たちは、キリストの再臨を期待し、「次の港」・「新しい住みか」へ行く日を待ち望んでいます。いつでもその準備ができていたパウロは、私たちのお手本です。さらにまた、その御国への準備が整わない、まだ信仰をもっていない人々に伝道する点においても、「肉にとどまる方が、あなたがたのためにもっと必要です」(フィリピ1:24)と、隣人のために心を固めたパウロは、私たちの先駆者です。

## フィリピの信徒への手紙1:27――

ひたすらキリストの福音にふさわしい生活を送りなさい。そうすれば、そちらに行っておあなたがたに会うにしても、離れているにしても、わたしは次のことを聞けるでしょう。あなたがたは一つの霊によってしっかり立ち、心を合わせて福音の信仰のために共に戦っており、

熟達した説教者パウロは、これから教会への勧め(フィリピ1:27-2:18)を書き出す冒頭に、ただ一言を掲げました。

「ひたすらキリストの福音にふさわしい生活を送りなさい。」

言い換えれば、礼拝で受けた恵みと平安を、私たちが日常生活の中で、聖霊の導きのうちに生かし続けるということです。そのために、ひたすら戦うのです。

その際、「自分を勝たせよう」、あるいは、「気の合う人と美酒を味わいたい」、などという誘惑の嵐が吹き荒れることでしょう。悪魔は、つかの間にすぎない「私の勝利」にこだわらせようと、人の隙をねらっています。しかし、大切なのは、私たちの礼拝と日常生活の中に〈神の真実〉を反映させることです。私たちは、主の十字架において勝利した〈神の真実〉の下に、天の国を目指して行進し続けるのです。

フィリピの教会が、そして、私たちの教会が〈神の真実〉を掲げ続けるには、どうしたらよいか、という点について、パウロは教会への勧めを語っています。

それが、「一つの霊によってしっかり立ち、心を合わせて(一つの心で)……」という句です。この句には、二回「一つ」が出て来ます。聖霊を指す「一つの霊」から私たちの「一つの心」へという展開が鮮明になっています。

問われているのは、天の国を目指して行進する私たち信徒が、また、教会が「一つの霊」の導きによって、ほんとうに「一つの心」になれるかどうか、です。そのために為されるべき第一は、最初から最後まで「キリストがあがめられる」ことですが、パウロは、そのことが私たちの中心に据えられるように、信仰生活上、多方面から信徒に助言を与えています。次のものは、懇切であり的確である助言の一つです。

フィリピの信徒への手紙1:28——

どんなことがあっても、反対者たちに脅されてたじろぐことはないのだと。このことは、反対者たちに、彼ら自身の滅びとあなたがたの救いを示すものです。これは神によることです。

「反対者たちに脅されてたじろぐことはない」、つまり、恐れてしまって、たじたじになることはない……。あなたは、強く、勇ましく戦うように、パウロからもっと熱い励ましを送られたいと思うでしょうか。

確かに、パウロは牢獄にあってもうちひしがれることなく、「福音の信仰のために共に戦っております(フィリピ1:27。参照 1:30「戦い」)。その際、伝道の仕方において、また、日常生活の仕方において、百戦錬磨のパウロは、負ける人のたいがいの共通点を見抜いていたのではないのでしょうか。

それが、焦ってすぐに「自分が」動き出す、そして、「自分の」りっぱな武器を取る、その結果、戦いを「自分の」戦いにするという点です。

間違ってはいけません。戦いは、神の戦い、御国への進軍のための戦いです。「自分の」真実を振りかざすのではなく、いつも〈神の真実〉を掲げるべきです。

「一つの霊」によって、信仰者、一人ひとりが諸悪の力に動じないとき、「脅されてたじろいでいる」仲間を励ますことができます。そして、教会は成長させられ、「一つの心」へと導かれ、礼拝の一致が保たれることでしょう。